

新・僕の図書館戦争

中 相作

すきあらば漫才を書きたがる

ここから手記になる。漫才のつづきの手記だ。タイトルに準じて、僕という一人称で書き進める。金井美恵子さんが昔、僕という一人称で随筆を書く作家なんてろくなくもんじゃない、みたいな感じで野坂昭如さんをおひやらかしていたことが思い出され、還暦を過ぎた男が僕でどうするという気もするのだが、なにしろ漫才のつづきだ。上方漫才の父と呼ばれた秋田實が確立した僕、君という定番の人称を用いないわけには行かない。

ところで君は、どうして僕がすきあらば漫才を書きたがるのか、不思議にお思いかもしれない。理由は単純。僕は漫才作家になるうとしてなれなかつた人間だからだ。もう四十年近くも昔の話になる。漫才作家を志しながらどうすればそんな職業につけるのか、それがまったくわからなかつた僕は、大阪シナリオ学校というところに大衆芸能科なるコースがあることを知り、その門を叩いた。実際に門や校舎があつたわけではない。授業のたびにビルの一室を借りるような安手の学校で、講座は週に一回程度。名張から

大阪まで、近鉄電車に揺られて通つた。

秋田實先生はまだご健在で、大阪シナリオ学校では名誉校長か何かをお務めだつた。血色のいい頬に白髪、小柄で話好きな老紳士だつたが、喫茶店では子供のようによつてホットケーキをばくつくのが常でいらつしやつた。「渡り来て浮世の橋を眺むればさても危うく過ぎしものかな」という先生の辞世は、いまでもよく記憶している。

昭和二年、大阪の波屋書房から世界探偵文芸叢書第三編としてフレッチャーの『刺青夫人』が、江戸川乱歩名義の序文入りで出版された。この本の訳者、林広次というのは秋田先生の本名だ。これが若き日の先生なのかどうか、気にかかつてはいるのだが、いまだに調べがつかっていない。

秋田先生の死去は昭和五十二年。東京ではツービート、大阪ではB&Bやザ・ぼんちをはじめとした若手コンビが脚光を浴びて芸能界を席捲し、いわゆる漫才ブームが訪れる三年ほど前のことだつた。上方漫才界は長い低迷のなかにあり、曙光はどこにも見えなかつた。僕は僕で、漫才作家などという職業はそもそも成立しないらしいとようやく